

津山郷土博物館だより「つはく」

津博

TSUHAKU

2014.4 No.80

トピックス

美作略史出版記念講演会
博物館行事の実施
博物館資料の貸出

研究ノート

久世代官早川八郎左衛門の怒り
小島 徹

お知らせ

平成26年度の行事予定



津山郷土博物館

Tsuyama City Museum

(表紙写真 愛山松平家墓所唐門)

『美作略史』
出版記念講演会

「美作略史雑談」

2014年3月9日 三好 基之先生



『新訂・増補 美作略史』の出版を記念して、3月9日に当館で講演会が催されました。講師は、本書を執筆された三好基之先生です。30年余りに渡るご研究の集大成ともいえる本書執筆の裏話や、研究によって明らかになった古代・中世の美作国の様子について、お話しいただきました。会場には、約60人の聴講者が来場し、お話を熱心に聴き入っていました。

『新訂・増補 美作略史』販売中!

明治14年（1881）、郷土の歴史家・矢吹正則により出版された『美作略史』は、編年体で記された美作国の歴史書です。この『美作略史』を基に、三好基之先生が新たに収集した史料を盛り込んで編集したのが『新訂・増補 美作略史』です。

三好先生は、県立博物館・美術館や県史編纂室などご勤務の後、ノートルダム清心女子大学大学院教授を務められ、長年にわたり美作地域の歴史を研究してこられました。本書は、そのご研究の集大成であり、今後の美作の歴史研究には欠かせない一冊です。

なお、明治の『美作略史』は、和銅6年（713）の美作国の成立から明治4年の廃藩置県までが収録されていますが、江戸時代については膨大に残る関連資料のすべてを網羅することは不可能なため、今回の新訂・増補版では、慶長8年（1603）の森忠政の美作拝領までとなっています。

本書は1冊2千円で、当館や市内の書店で販売中です。ぜひお問い合わせになり、奥深い史料の世界に触れていただきたいと思います。



津山には
本当に古い歴史が
あるんだなあ



博物館キャラクター
おパシ夫



3月22日に、平成25年度最後の文化財めぐりを行いました。前日の悪天候とは打って変わって、春を感じられる好天に恵まれ、大谷から平福までおよそ6kmの道のりを歩きました。煙硝蔵^{えんしょうくら}では内部も観察でき、佐良神社では宮司さんの貴重なお話も伺えました。参加者の皆さんの交流も深まった、楽しいハイキングとなりました。

第101回 文化財めぐり

市内大谷〜平福



博物館協議会の開催



平成25年度の博物館協議会が2月19日に開かれました。協議会の委員には6名の方を委嘱し、博物館の運営について実績報告と今後の計画をお示しして、ご意見やアドバイスをいただいています。今回も、博物館の利用状況・収蔵資料・収蔵スペース・年間予算などについて、貴重なご意見をいただきました。

ご参加・ご出席の皆さん、
ありがとうございました。



博物館キャラクター「ファイアー」

黒田官兵衛の書状

岡山城天守閣へ貸出

今年の大河ドラマは「軍師官兵衛」ですが、実は当館の寄託資料にも黒田官兵衛の書状があります。3月15日から5月6日まで岡山城天守閣で行われる春季特別展「黒田官兵衛の生きた時代―岡山の戦国の世」に出品のため、この資料を貸し出しています。

書状は2通あり、天正10年（1582）3月に羽柴秀吉から高野の国人・牧佐介に発給された禁制状に關連して、発給の経緯を記したものです。



現在、当館では写真パネルでの展示ですが、返却され次第、実物を展示する予定ですので、この機会にぜひご覧ください。

紅葉山東照宮の御簾・津山景観図屏風

江戸東京博物館へ貸出

3月18日から5月11日まで、東京の江戸東京博物館で行われる特別展「大江戸と洛中くアジアのなかの都市景観」に出品のため、紅葉山東照宮の御簾と津山景観図屏風を貸し出しています。

紅葉山東照宮は、江戸城内の本丸と西の丸の間の紅葉山に、元和4年（1618）に建てられた東照宮です。御簾は、紅葉山東照宮から下げ渡されたものが、享保21年（1736）に中山神社神官の手に渡り、伝来したものです。近年、当館に寄贈され、江戸東京博物館に調査を依頼したことをきっかけに、今回の出品となりました。

資料の返却後、当館でも展示したいと考えていますので、ご期待ください。



東京や岡山へ出かける人は
立ち寄ってみてね!



つぎょうのすけ
博物館キャラクター「津郷之介」

久世代官早川八郎左衛門の怒り

小島 徹

―津山城下の通行・宿泊をめぐる―

はじめに

寛政年間（1789～1801）に美作国内の幕領代官として久世の陣屋に赴任していた早川八郎左衛門正紀（1739～1808）は、庶民教化・農村振興に努めた名代官として世に知られています。当時の美作国内は、幕領と津山藩をはじめとする諸藩の領地が複雑に入り乱れていたため、幕府の代官も領内の巡視などの公務でたびたび津山城下を通行し、時には津山で宿泊することもありました。

しようか？この時の代官一行の様子と津山の町方の対応について、津山の町奉行であった増見右門は、その状況を詳しく業務日記（『町奉行日記』）に書き留めています。以下、その記述をもとに経緯をたどってみましょう。

遅れた先触

寛政10年（1798）8月、大坂から任地久世へ向かった早川八郎左衛門は、津山城下の通行・宿泊において、大いに立腹しています。いったい、何に対して怒りを覚えたので

8月24日、任地へ戻る早川の手代から出された先触が津山に届きます。先触とは、幕府の役人や大名・公家などが旅をする際に、通行予定の街道の宿場に対して、必要となる人馬の継立てや休憩・宿泊の準備をしておくように、事前通告する文書を指します。その先触には、家内一同14人で21日の朝に大坂を出発し、24日

には津山で宿泊することが記されていました。



久世陣屋跡にある早川の立像

後でも触れることになりました。ですが、この時早川は、妻を同行させています。実は、7か月前の同年正月、彼は江戸へ出向いているのですが、この時は上下8人での旅でした。津山

の「町奉行日記」を見る限り、この後8月まで、早川が津山を通行して久世へ戻った様子は確認できません。おそらく何らかの公務のために江戸へ出向き、その帰りに妻を連れて久世に戻った、つまり自らの任地に家族ともども住まうことを決めたものと思われまます。

この先触は、19日付で大坂から出されています。通行経路に当たる各宿場への事前通告ですから、通常であれば通行予定日の数日前には届くように手配されます。実際、通行者本人である早川の旅程も、大坂から津山までの所要日数が3日ですから、19日に大坂から発送された先触ならば、遅くとも22日には津山に届くうなものです。しかし、津山に届いたのは、宿泊予定の24日当日のこと

でした。先触の到着がこれほど遅れてしまったのは、なぜでしょうか？当時のことから、川止めなどのやむを得ぬ事情があったのかもしれないませんが、「町奉行日記」には何も記されていません。ただ、この先触到着から早川一行の宿泊までが、

長々とした1か条で日記に記されているところに、津山の町方の慌てぶりがうかがえるようです。

相次ぐ不手際と旅宿の不備

先触を受けた町奉行の増見は、上司とも相談の上で前例にならった対応を、配下の同心組や町方を取りまとめる大年寄に指示します。その要点は、次のとおりです。

- ① 道筋の掃除は必要ないが、見苦しくない程度にしておくこと。
- ② 同心組は城下通行時の先払いと旅宿周辺の夜間警備に当たる。
- ③ 旅宿は坪井町の三船八郎右衛門宅とする。
- ④ 大年寄は旅宿へ挨拶に出向くこと。
- ⑤ 渡河で船が必要な兼田と院庄には、蔵元と船年寄が出向くこと。

最初に早川一行を出迎えるのは、兼田において⑤の蔵元・船年寄たちのはずでした。ところが、船奉行の勘違いで派遣されず、その間違いに気付いて改めて派遣指示が出されたものの、一行の到着には間に合いませんでした。日記には、明朝の院庄

兼田において⑤の蔵元・船年寄たちのはずでした。ところが、船奉行の勘違いで派遣されず、その間違いに気付いて改めて派遣指示が出されたものの、一行の到着には間に合いませんでした。日記には、明朝の院庄



津山城下町人地家割図の坪井町周辺部(当館蔵)

ほぼ中央に見える間口の広い屋敷が三船家。

での見送りには必ず蔵元たちが出向くよう大年寄に指示したと記されています。

そして、同心組の不足を補うために要請していた応援人員の到着が遅れたこと、早川一行の行進が想定よりも早かったことなどから先払いも遅れてしまい、一行が林田町まで来たところでようやく合流でき、そこから先払いを始めるという始末でした。報告を受けた増兎は、この失礼は自分の指示の不行届きによるものと反省し、その後の対処法を大目付に相談しています。

含んでいます。しかし、一行の怒りは収まる気配が無く、ついには大年寄が呼び付けられ、早川から直々に次のように厳しく叱られたというのです。「我々は軽い身分ではあるけれども幕府の御用で旅をしているのであつて、どこを通つても先払いや使者が出される。津山では例が無いが、他所では町奉行も迎えに出るほどののに、今回の宿は湯殿も飯の造りで、妻を連れていて非常に迷惑している。このように軽んじられては、御政道も立ち行かぬ」と。それでも、大年寄がい

ろいろと詫言を申し入れたところ、「今回のところは一夜限りのことでもあり、大目に見ることとするが、今後はこのようなことが無いように」とくぎを刺されて、ようやく許しを得たのでした。

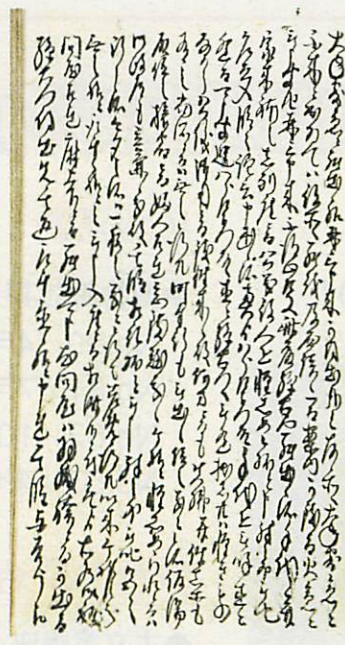
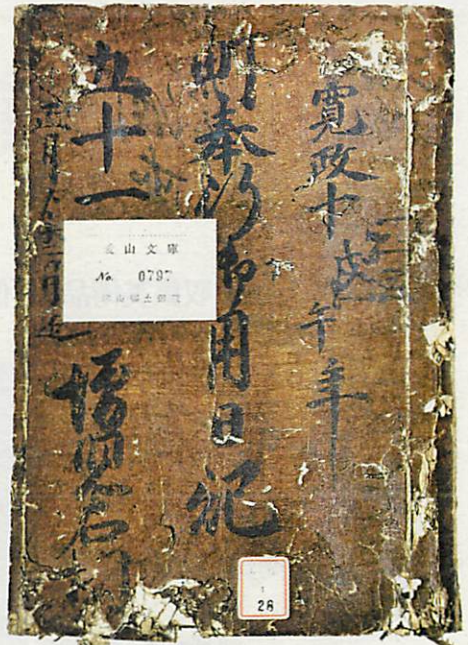
ちなみに、旅宿として早川の機嫌を損ねた坪井町の三船家については、大年寄玉置家の文書中に「三船百五郎居宅」の図面があります。当主の名前から察するに、本陣を勤めることになった幕末期のものと思われるですが、いくつかの貼紙の一つに「便所と湯殿の縁周りが大破しているので建て替えをお願いしたい」との記載があり、ある時期に老朽化した建物の修繕を依頼している様子がうかがえ、今回の一件との関連も考えられます。

その後の経過

早川一行は翌朝6時ごろに宿を出発、この日の城下の通行と院庄での渡河は、失態なく終了しました。先払いに遅れた同心の処分や早川への謝罪などについて、増兎が大目付を通じて重臣たちの指示を仰いだところ、「追つて通達するまで、同心たちは普段どおり勤務させよ。早川への謝罪などはしなくても良からう」とのことでした。その後、8月27日に蔵元・船年寄派遣の前例調査が行われ、9月14日に大年寄から本件の応対に関する報告書類が提出され、11月13日には代官手代からの話として、早川が未だに怒りを抱いているらしいとの情報が町人から入り上司に報告した後は、「町奉行日記」では本件に関する記事は見当たらずとなり、同心についても処罰された形跡は見られません。

ただし、8月後半には丹後久美浜代官の野村権九郎が論所見分のため美作国内に来ており、その行き帰りに津山を通行していますが、その際は東か西の大番所前に町奉行が挨拶に出向いています。帰りの通行は早川との一件直後の9月3日ですが、行きの通行時には代官も駕籠を降りて挨拶を受けたのに対し、この時は町奉行の眼前まで駕籠に乗ったまま近付いて戸を開けられ、増兎の表現を借りると、直に挨拶せねばならぬように「仕懸けられ」、やむなく腰をかがめて挨拶したこと。他に詳しい記述はないのですが、早川的一件を伝え聞いた野村が、自分も軽んじられまいと考え、あえて挨拶を受け方を変えたのでしょうか。

いずれにせよ、この件については、



寛政10年の津山藩「町奉行日記」(当館蔵、右は表紙、左は8月24日条の一部)
旅宿の不備について厳しく叱られたという大年寄からの報告が、詳しく記録されています。

町奉行の対応が早川の場合と異なるのが気に掛かります。同じ代官職でありながら、町奉行が挨拶に出向く場合とそうでない場合があるのは、何らかの基準による区別なのか、それとも以前から早川との間に何らかのしこりがあつて出向かないのか？日記から類例を抜き出して、よく検討する必要があります。

また早川は、その後関東へ転任す絡しておきながら、直前になって津山を通らない道筋に変更したり、予定どおりに通行する場合でも、先触のとおり用意した人足を、迎えの人足が来たから要らないと言って断つたりしていますし、転任のため久世を離れる際にも、松江藩の支藩・広瀬藩主の帰国行列の津山宿泊予定日に津山を通行すると通告して関係者を慌てさせています。結果的には、

るまでの3年足らずの間に、何度か津山を通行しています。寛政10年8月の一件を根に持っていたかのような様子が見えます。津山通行時に雨で川止めとなり、宿泊の必要が生じた時間も、先を急ぐからと言って皿村経由で久世へ帰ったり、いつたんは津山を通行すると連

広瀬藩主の行列が川止めで遅れたため、日程が重ならず済んだのですが、どうも早川の行動は、津山への意趣返しに思えてなりません。美作を離れる間際まで、津山に対する怒りは解けなかつたのでしょうか。

おわりに

以上、「町奉行日記」の記述から、事件の推移をたどりました。不手際がたび重なつたため、旅宿の湯殿を見たところで早川の堪忍袋の緒が切れたものと思われませんが、そもそも諸準備が間に合わなかつたのは、「町奉行日記」を読む限り、先触到着の遅れによるものと考えられます。この点について、日記に何も触れられていないのが腑に落ちないのですが、当時の考え方としては、そのような言い訳は通用しなかつたのでしょうか？

また、早川の怒りの強さを考えると、以前から津山藩に対してあまり良い印象を持っていなかつたのではないかと、とも想像できます。そうした考へた時に気に掛かるのは、藩主松平家の越前家嫡流としての強い自負と家格へのこだわりです。こうした意識は、多かれ少なかれ藩士たちも持っていたでしょうから、外部の者から見れば、言動の端々にそれが感じられて鼻につく、という状況がしばしばあつたと思われれます。早川の強い怒りの奥底にも、「津山藩は何かにつけて高圧的だけだからぬ」という長年の憤懣が溜まつていたのではないのでしょうか。

なお、この時に早川が久世に連れてきた妻は、2年後の寛政12年6月に亡くなり、久世陣屋隣の重願寺に葬られました。あるいは、死期が近いことを知り、江戸に残すのが忍



重願寺に眠る早川の妻の墓
池田宝刻「正法」の娘、栄薫大姉、直香貞栄、三宅菅栄、幕臣菅栄殿蓮

びなかつたのかもしれません。いざれにしてもこの一件は、名代官と称えられる早川の内面をかいま見ることができる、興味深い出来事だといえます。

平成26年度 津山郷土博物館 行事予定

特別展示

◆特別展「^{かんた}苅田家収集美術品展(仮)」

会期／10月4日(土)～11月3日(月)祝

津山市に邸宅が寄贈された商家・苅田家には、広瀬台山や飯塚竹斎など郷土ゆかりの人物の作品を含む掛軸や屏風類が多数伝来しています。それらの美術品を中心に、津山の豪商が代々守り伝えてきたコレクションを紹介します。



広瀬台山筆「遺琴贈帰図」

◆「江戸一目図屏風」の実物公開

春季／4月5日(土)～5月6日(火)祝

秋季／11月6日(木)～11月30日(日)

出版

◆特別展図録

「苅田家収集美術品展(仮)」の刊行

◆「津山松平藩町奉行日記」22の翻刻刊行

◆平成25年度年報の刊行

◆研究紀要の刊行



博物館キャラクター
「鶴若」

いろいろな行事があるので、
どんどん参加してね!

広報活動

◆博物館だより「津博」の刊行

No.80／4月

No.81／7月

No.82／10月

No.83／来年1月

教育普及活動

◆古文書講座「津山藩松平家文書を読む」

5月15日(木)・6月19日(木)・7月17日(木)

9月18日(木)・10月16日(木)・11月20日(木)

1月15日(木)・2月19日(木)・3月19日(木)

全9回(8月と12月を除く)

◆夏休み子供歴史教室

「陶棺をつくろう」

7月24日(木)・8月12日(火) 全2回

「カルメ焼きをつくろう」

7月30日(水)

「勾玉をつくろう」

8月5日(火)・6日(水)

「トンボ玉をつくろう」

8月19日(火)・20日(水)

◆文化財めぐり(友の会)

5月17日(土)・10月18日(土)・3月21日(土)



博物館だより「つはく」
No.80 平成26年4月1日

津博
TSUHAKU

[編集・発行] 津山郷土博物館

〒708-0022 岡山県津山市山下92
Tel (0868) 22-4567 Fax (0868) 23-9874
E-mail tsu-haku@tv.tn.ne.jp

[印刷] 有限会社 弘文社

入館のご案内

[開館時間] 午前9:00～午後5:00

[休館日] 毎週月曜日・祝日の翌日

年末年始(12月27日～1月4日)・その他

[入館料] 一般…200円(30人以上の団体の場合160円)

高校・大学生…150円(30人以上の団体の場合120円)

中学生以下・障害者手帳を提示された方・
市内在住の65才以上の方は、入館料が無料です。